



発表要旨集

国際シンポジウム

エコクリティシズムと日本文学研究

—自然環境と都市

日程：2010年1月9日（土） 1月10日（日）

会場：立教大学 池袋キャンパス太刀川記念館3F 多目的ホール

使用言語：日本語

主催：立教大学大学院文学研究科日本文学専攻

共催：青山学院大学文学部日本文学科

コロンビア大学東アジア言語・文化学部

後援：立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科

立教大学ESD研究センター

立教大学観光学研究所

立教大学日本学研究所

立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター



【基調講演】

■ハルオ・シラネ(コロンビア大学)

四季の文化—二次的自然と社会

私は今回の発表で、エコクリティシズムと日本の文学や文化に関連する広範な問題を取り上げてみたい。九世紀の紀貫之以来、第二次世界大戦後、今日に至るまで、日本の文学研究者や作家たちの多くが、日本文学ならびに文化の重要な特徴のひとつは四季と自然への注視であり、それは大方、日本の風土や地勢によってもたらされた、と論じてきた。しかし、自然への親近感や四季の重視は、ほとんど貴族社会や貴族的ジャンル(特に和歌の伝統)が作り出したものであり、それは八世紀、まさに日本文化が「都市化」し、大陸の強い影響下にあった時期に起こった。自然をその色や香り、動きから優雅で繊細なものとみなした和歌は都市的ジャンルであり、他の多くの関連する都市的(都中心の)ジャンル——絵、庭園、寝殿造り、(のちに生け花、盆栽、茶の湯)——とともに、優雅な形で自然を再構築し、私が呼ぶところの「二次的自然」を産み出した。この「二次的自然」はまた、より大きな「うつしの文化」の一部でもあり、外界の自然、遠く離れた土地、風景をたいていは縮小版かミニチュア版で都市の真ん中や住居の中へと移植した。批評家が論じる自然との親密性といういわゆる日本的感性は、二次的自然がほぼすべての文化様式に浸透し、普及した結果出来上がったものなのである。また、こうした二次的自然の重要な特徴のひとつに、新たな生命をもたらす、自然からの危険を防ぐ目的、すなわち、私が呼ぶところの「護符的性質」が含まれていることも指摘したい。

日本文学の自然表象にみられるもう一つの主要な側面として、動植物や岩石の靈魂を信ずるアニミズムがある。それは古代の『古事記』や『日本書紀』に顕著に現れているが、平安時代には優雅で都市的な二次的自然がきわめて隆盛となり、影を潜める。しかし中世後期になると多くの新しいジャンル——特にお伽草子と能——において、かつてのアニミズムが社会的により多様化した状況のもとで再び姿を現し、貴族文化の花鳥風月と融合する。中世後期におけるこれら二種類の自然表象の接点についても、今回の発表で触れたいと考えている。

【シンポジウム1 二次自然と野生の自然】

■加藤幸子(作家)

都市の自然と創作

夏の終わりから秋にかけて紅と黄色の小花を撒きちらしていたミズヒキとキンミズヒキがようやく終焉を迎え、庭の彩りは単調になった。代わって淋し気だったえさ台がしだいににぎやかになり、五十羽近いスズメたち、シジュウカラ、メジロ、キジバト、ヒヨドリが交互に訪れる。ここ数年は鳥に混じって、近辺一帯に繁殖しているクマネズミが食事をとるようになり、私を困惑させるようになった。子ネズミ七匹が並んで穀粒を食べている様子は“愛らしい”の一言に尽きるとはいえ……。

屋内に目を転ずれば、傘立ての内部にうっすらと不規則な網を張っているクモがいる。体色は地味だが、足が異様に長い。網の端に触れると体をコマのように回転させた。図鑑で調べるとイエユウレイグモという名を持っている。

暗くなっても庭はにぎやかだ。姿は見えないが、コオロギやカネタタキがくさむらで鳴いている。雌を求めてのラブコール。

大都市の片隅のわが家にさえ、まだ数え上げれば切りのないほどの野生の生きものが棲んでいる。ましてや草木の多い公園や空地は、生物の隠れ里であろう。都市生態系は、人間のみで

構成されているわけではない。都市を構成する人工物の間隙を縫って、あるいは逆に利用して（カラスのように）、自然は依存し続ける。とすれば、都市生活をしながらネイチャー・ライティングの題材を見つけることもできる。人間そのものを、自然の生きものとして認めれば、領域はもっと広がるだろう。拙著、「池辺の棲家」は以上のような考え方が底辺にあって、書いた連作だった。特にネイチャー・ライティングを目指したものではないけれど、池辺の生物たちと女主人公の関係を描くことによって、人間の（特に女の）自然性が表現されたかもしれない。

またここ十年ほどは、自分の文学の在り方として他の生物の“固有の意識”にとりつかれている。多様性に満ちた自然を人間の意識で解釈すれば、容易に擬人化されてしまう。その方法が一つの道であることを否定はしないが、私の文学の在り方として、たとえば“鳥”にも読める小説を書きたい、というのが念願なのだ。「体ヲナクセ、心ヲ残セ」という短編集はその試みである。

■小峯 和明（立教大学）

南方熊楠と熊野世界

近代の始発期に活躍した博物学者の南方熊楠はエコロジーの先覚者としても知られる。とりわけ政府による神社合祀に異を唱え、心血を注いで展開された反対運動は市民運動の先駆として近年とみに評価が高い。なかでも、1911年8月に時の植物学者の松村任三宛に執筆された二通の書簡は、熊楠がすでに文通を始めていた柳田国男に仲介を依頼、それを読んだ柳田が多く読者に提供しようともくろみ、50部ほどを公刊したもので、ひろく「南方二書」の名で呼ばれている。この書簡には、熊野を中心とした地域での神社合祀がいかに関環境破壊を押し進めているかが、熊楠独特の文体と豊富な事例で力強く訴えられている。2006年、自筆書簡が正式に南方熊楠顕彰館の所蔵となったのを機縁にあらためて翻刻され、影印とともに顕彰会から公刊された（『原本翻刻 南方二書—松村任三宛南方熊楠原書簡』南方熊楠顕彰会）。従来の平凡社版全集の誤謬が大幅に補正され、信頼すべき本文が整ったといえる。

熊楠が対象とした地域は近年、世界遺産に登録されて関心が高まっている、まさに熊野古道をはじめとする熊野三山の聖域にほかならず、明治期の熊楠世界がそれまでどのようなようであり、それが合祀問題を契機にいかに変貌したかをうかがう絶好の資料ともなっている。それと同時に熊楠が熊野にみていたものは、聖地にかかわるさまざまな生きた伝承であった。聖地は実体的な空間や環境としてあるだけではなく、そこには有形、無形の伝説や伝承が覆いかぶさり、堆積している。多種多彩のイメージや言説がおり重なりあい、堆積し輻輳した場として聖地はある。自然環境の破壊はまさしくそうした聖地の言説やイメージの渦それ自体をも消してしまう。自然に根ざした、共同体のうけつがれるべき文化の記憶の消滅に熊楠は警鐘を鳴らしていることが読みとれるのである。熊楠には「昔人の心になって観察すべし」という態度や方法が徹底していた。自然観察とそこにまつわる伝説や伝承とは切っても切れない関係にあり、その双方を一体化したものとして見ていた。

熊楠の学は身近な生活と地球規模の世界における事象とを接続させてゆくひろがりがあり、伝説や伝承には必ず人々の生きた知恵が息づいているとの確信を持っていた。熊楠の基本は生命の不可思議の探究にあり、独特の曼陀羅論に収斂していくわけで、自然環境とそこから生み出された二次的な自然や環境を考えるのに熊楠の思考は今もふりかえり参照すべき点が少ない。ここではそうした熊楠の熊野を中心とする言説とその意義をとらえてみたいと思う。

■佐藤泉（青山学院大学）

「東京湾人工島13号埋立地の空虚 日野啓三『夢の島』とポストモダン・日本」

風景を「文化資源」として再認する発想が、近年の日本社会にも広がりつつある。昨年（2009年）開催された「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」では、新潟の農村共同体が長い歴史のなかで培ってきた棚田や、集落、廃屋、廃校、深い緑の淵を懐に抱いた溪谷を背

景にして現代アートが展示され、地域内部の住民とその外から集まってきたアーティスト、支援者たちとの共同作業の空間が創りだされている。また、同じく2009年には、近代以来の産業化の歴史を支え、やがて石油エネルギーへの転換とともにさびれていった各地の「炭鉱」が視覚芸術のカテゴリーにおいて再認され、「文化資源としての炭鉱展」として展示されるにいたった（目黒区美術館）。「野性の自然」と「産業景観」とをともに「文化資源」のレベルにおいて再認する新しいまなざしが、人々の共同性の空間が生みだすことへと繋がった。「知」と「文化」と「生活環境」を繋ぐ枠組みをさぐるころみのなかで、風景に新たなレベルが重ねられたのである。

この報告では、こうした発想を逆にさかのぼって1980年の都市論を再考したい。具体的には日野啓三の小説『夢の島』（1985年）をとりあげ、都市景観をとらえる知の枠組みについて考察したいと考える。日野啓三は都市のなかに無機的な美を発見し、そこに「近代」を越える価値を付与することに成功した。この作家の代表作の一つである『夢の島』は東京湾ゴミ埋立地の荒涼たる「原野」に魅せられた男が主人公となっている。ところが、作品の舞台である「お台場」は、90年代後半以降、「荒涼たる原野」ではなくなっている。「臨界副都心」の枠組みのもとに再開発され、独特の非現実的な空間として形成され、さらにフジテレビ本社ビルがここに開業したことによって、テレビシリーズ「踊る大捜査線」を劈頭に、お台場は自らの「自画像」を発信することについても積極的な姿勢を打ち出している。これは風景が自らにイメージを与えることによって、風景自体が変容していった興味深い事例だといえるだろう。また、いくぶんか不吉な事例であることも確かだろう。80年代から90年代にかけて、小説と実際の空間との背景にどのような知的文化的な想像が働いていたのかを再検証し、生活空間と共同性を重視した「文化資源」論が現在なぜ必要となったのかを理解するための手だてとしたい。

■ ジャック・ストーンマン（ブリガム・ヤング大学）

（日）かいじゅうたちのいるところ：中世和歌に於ける二次的自然と野生的自然—西行・寂然の「山里」贈答歌を中心に

西行(1118-1190)と寂然(生没年不詳 1120- 1182 年以降)は、若き日の出家時代、山野における隠遁生活についてそれぞれ十首の歌を取り交わしている。これらの歌は、隠者としての理想のみならず、それぞれ高野山と大原における隠遁場所の環境を描いている。西行の歌は革新的で、語彙もイメージも野性(wildness)に富んでいる。寂然の歌は保守的で、牧歌的な都市周辺の風景(二次的自然)を描くようになっていた隠遁和歌の規範に即したものであった。これらの歌を比較分析することによって明らかになることは、西行ら中世の革新的歌人たちにとって、伝統に則った「草庵」や「山里」といった題に纏わる歌語では、平安末期に増加していた遁世者たちが実際に知っていた「馴致されぬ自然」を描くには不十分であったことである。西行の歌はまた、中世和歌における重要な動向、つまり主流文化から距離を置き、その詩的理想や規範的な歌詞・題などに対して距離を取ろうとする動きのあることを示唆している。西行によって、歌における隠遁生活の修辞・表現は屈折され、多様化され、穏やかな都市近郊の風景のイメージは消えて、山野の怪異が歌の前面に登場するのである。

（英）Where the Wild Things Are: Peri-urban and Wilderness Landscapes in the Poetry of Saigyō and Jakunen

Early in their lives as monk recluses, Saigyō 西行 (1118-1190) and Jakunen 寂然 (ca. 1120-after 1182) exchanged ten poems each on the topic of reclusion in mountain locales. These poems describe the environments of their hermitages in Mt. Kōya and Ōhara as well as the poets' eremitic ideals. Saigyō's poems are radical in the wildness of their diction and imagery. Jakunen's poems are conservative in their depiction of the sort of pastoral, peri-urban landscapes that had come to be standard in Japanese reclusion poetry. Comparative analysis of

these poems will reveal that for innovator poets of the medieval period such as Saigyō, the traditional poetic language of “thatched huts” (sōan 草庵) and “mountain homes” (yamazato 山里) was insufficient to describe the untamed landscape of reclusion hermits (tonseisha 遁世者) were experiencing in increasing numbers by the end of the Heian period (794-1185). Saigyō’s poems also signal a key movement in medieval poetry away from the center, its poetic ideals, and its canonical language. The poetic trope of reclusion, in Saigyō’s hands, becomes both inflected and ramified as the genteel imagery of peri-urban landscapes gives way to the grotesquerie of mountain wilderness.

■舛谷 鋭 (立教大学)

ロマン主義と観光のまなざし

フーコーの医学的まなざしを援用し、日常から離れたものとして景色、風景、町並みにまなざしを向けることを観光とすると、こうしたまなざしは社会的に構造化され組織化されているという。観光文化研究において「ロマン主義的ツーリスト論」という課題があるが、所詮、商業と文化の問題かもしれない。結論を先取りすると、ロマン主義による観光のまなざしとは、見たいものを見たいように見る、あるいは見たくないものは見ないということか。

ここで観光と文学の関係を眺めておこう。第一に、観光の側から文学とは他のメディア同様、まなざしを強化、ある場合は経典化するものと言える。特にロマン主義は旅人に自然という「書物」の読み方を指南してくれた。

第二に、作家を観光におけるホスト側、読者をゲストに想定した、文学理論の敷衍が考えられる。自然はテキスト化されることによってはじめてゲストが消費可能となるという一面がこうしたゲスト/ホスト論の基盤の一つになっている。

第三に、ジャンルの問題としてトラベル・ライティングとネイチャーライティングの互換性が上げられる。

それでは、こうした文学的ロマン主義はいつ観光のまなざしに入り込んで来たのか。19Cの中産階級によるマスツーリズムの原型として「グランドツアー」があり、これは17Cイギリス貴族子弟のスタディツアーであった。グランドツアーは19C以降にロマン主義的風景観光という個人的な感動体験へと転換し、価値観の変容をもたらす。感動や感覚の激しさに力点が置かれ、知的な明晰さより詩的な神秘性、さらに享楽性が加味された。具体的な作家名で言えばシェリー、バイロン、ワーズワズらだろう。

こうして観光に入り込んだロマン主義的まなざしは一種の型を形成した。それは孤独、隔絶、個人的精神性の鼓舞であり、手つかずの神聖な自然の追求である。これはもう一つの観光のまなざしの型である集合的まなざしと対極にあり、後者は人が多いから価値がある、行列店やカーニバルを好む嗜好である。

しかし、ロマン主義的孤独の価値が普及すると、ゲストがそこに集中し、マス化現象が起こる。これは孤独なロマン主義的環境にダメージを与えジレンマを起こす。

文学をはじめとするメディアの影響はポスト(マス)ツーリスト形成にも関わっている。彼らには本物/偽物の区別はなく、観光体験の疑似イベント、ゲーム性に歓喜し、多様性に触発される一種の「おたく」である。こうした価値観は文学によって涵養あるいは文学そのものをハイパーリアル観光として消費する可能性さえある。

こうしたハイパーリアル観光の筆頭に上げられるのがディズニーランドだが、創始者ウォルト・ディズニー自身はアメリカ中西部ミズーリの出身で、彼の自然観は泥と埃の大地の自然への憎悪と敵意だった。こうした原体験が安全で清潔な世界としての人工物「ディズニーランド」を生んだと言うのだ。

最後に、観光における環境保護主義の動向に触れておこう。真っ先に上げられるのはエコツ

ーリズムへの関心だろう。また、産業界では Sustainable (持続可能性) ツーリズムへの要請も根強い。自然の代用品をどのように形成するかという問題だが、自然のまなざしの範囲で捉えられる行為として、自然食品、古民家、ジョギングなどの軽運動、山歩きなどが上げられよう。これらはいずれも学んで行われることであり、やはりつくられた自然とは言えまいか。

そもそもロマン主義的まなざしにおける田園(田舎)風景の創出は、生産・労働に関わる人工物(ダム、電柱など)の排除だった。田園の見世物化は進み、そこへ車で行って、歩くというふるまいを、まなざしが引き起こした皮肉として眺めることもできよう。

フーコーの医学的まなざしを援用し、日常から離れたものとして景色、風景、町並みにまなざしを向けることを観光とすると、こうしたまなざしは社会的に構造化され組織化されているという。観光文化研究において「ロマン主義的ツーリスト論」という課題があるが、所詮、商業と文化の問題かもしれない。結論を先取りすると、ロマン主義による観光のまなざしとは、見たいものを見たいように見る、あるいは見たくないものは見ないということかもしれない。

ここで観光と文学の関係を眺めておこう。第一に、観光の側から文学とは他のメディア同様、まなざしを強化、ある場合は経典化するものと言える。特にロマン主義は旅人に自然という「書物」の読み方を指南してくれた。

第二に、作家を観光におけるホスト側、読者をゲストに想定した、文学理論の敷衍が考えられる。自然はテキスト化されることによってはじめてゲストが消費可能となるという一面がこうしたゲスト/ホスト論の基盤の一つになっている。

第三に、ジャンルの問題としてトラベル・ライティングとネイチャーライティングの互換性が上げられる。

それでは、こうした文学的ロマン主義はいつ観光のまなざしに入り込んで来たのか。19Cの中産階級によるマスツーリズムの原型として「グランドツアー」があり、これは17C イギリス貴族子弟のスタディツアーであった。これが19C以降ロマン主義的風景観光という個人的な感動体験へ転換し、価値観の変容をもたらす。感動や感覚の激しさに力点が置かれ、知的な明晰さより詩的な神秘性、さらに享楽性が加味された。具体的な作家名で言えばシェリー、バイロン、ワーズワーズらだろう。

こうして観光に入り込んだロマン主義的まなざしは一種の型を形成した。それは孤独、隔絶、個人的精神性の鼓舞であり、手つかずの神聖な自然の追求である。これはもう一つの観光のまなざしの型である集合的まなざしと対極にあり、後者は人が多いから価値がある、行列店やカーニバルを好む嗜好である。

しかし、ロマン主義的孤独の価値が普及すると、ゲストがそこに集中し、マス化現象が起こる。これは孤独なロマン主義的環境にダメージを与えジレンマを起こす。

文学をはじめとするメディアの影響はポスト(マス)ツーリスト形成にも関わっている。彼らには本物/偽物の区別はなく、観光体験の疑似イベント、ゲーム性に歓喜し、多様性に触発される一種の「おたく」である。こうした価値観は文学によって涵養あるいは文学そのものをハイパーリアル観光として消費する可能性さえある。

こうしたハイパーリアル観光として筆頭に上げられるのがディズニーランドだが、ウォルト・ディズニー自身はアメリカ中西部ミズーリの出身で、彼の自然観は泥と埃の大地、そうした自然への憎悪と敵意だった。こうした原体験が安全で清潔な世界としての人工物「ディズニーランド」を生んだという言うのだ。

最後に、観光における環境保護主義の動向に触れておこう。真っ先に上げられるのはエコツーリズムへの関心だろう。また、産業界では Sustainable (持続可能性) ツーリズムへの関心も根強い。自然の代用品をどのように形成するかという問題だが、自然のまなざしの範囲で捉えられる行為として、自然食品、古民家、ジョギングなどの軽運動、山歩きなどが上げられよう。これらはいずれも学んで行われることであり、やはりつくられた自然とは言えまいか。

そもそもロマン主義的なまなざしにおける田園(田舎)風景の創出は、生産・労働に関わる人工物(ダム、電柱など)の排除だった。田園の見世物化は進み、そこへ車で行って、歩くというポストモダン現象を今や皮肉なものとして眺めることもできよう。

■北條 勝貴 (上智大学)

〈負債〉の表現

〈二次的自然〉とは何だろうか。人間がどこかで生活を営もうとすると、その周辺領域は、認識論的にも実体的にも文化の範疇に組み込まれてしまう。言語や記憶によって分節・再構成された主観は一次的自然を捉ええないし、人間の採集・捕食活動、排泄行為などは、植生や生態系に否応なく影響を及ぼすからだ。庭園や里山はいうまでもなく、人間の定住によって、森林も草原も文化的存在へと姿を変えてゆく。もちろん程度の差こそあれ、自身の生存と増殖に適合的な環境を構築することは、人間以外の生物においても認められる。しかし大抵の場合、それを〈文化〉的活動とは呼ぶことはない。では、〈自然〉もしくは〈野生〉と〈文化〉の境界とはどこにあるのか。環境学にとって伝統的な問題ではあるが、これらの概念は慎重に再検討されなければならないだろう。

中国雲南省の少数民族納西族には、自然神(署)を祀る祭儀(祭署)が存在する。人類と署神は元来兄弟であり、それぞれ文化／野生の領域に分かれて生活していたが、人類の野生への度重なる侵犯に耐えかねた署神は、諸々の災害を起こしてこれを滅ぼそうとした。しかし、東巴(納西族のシャーマン)の祖神の調停で両者は和解し、毎年祭署を実践することを条件に、日常生活に必要な限りにおいては自然を利用することを容認されたのだという。2008年、同祭の記録と調査に雲南省麗江市を訪れたとき、協力者の老東巴は、その齋行の目的を「負債を返すためだ」と語った。

人間は、野生のものを文化に組み入れる際、このような「負債」を表現した神話、伝説、祭儀を多く生み出す。狩猟採集社会に息づき、精霊の送り儀礼を伴う(動物の主神話)や、樹木が木材化を拒否する(伐採抵抗伝承)などは、その典型といえるだろう。これらは、例えば著名なアイヌのイオマンテ、浄瑠璃や歌舞伎にもなった「三十三間堂棟木由来」として、日本列島のなかにも広汎に存在している。その背景には、「日本人は自然に優しい民族である」といった浅薄なエコナショナリズムや、「緑豊かな里山が大切に保持されてきた」といった(創られた伝統)からは窺い知れない、過酷で緊張感の漲る、しかしより豊かで多様な自然との関係が浮かび上がってくる。

自然から返済しがたいものを背負ってしまったという後ろめたさ、それを感じる心の動きは何に由来し、どのように構築されてきたのか。〈そのままの自然〉が決して私たちの眼前に立ち現れないとすれば、それこそが負債の本質を意味するのかもしれない。

■山里 勝己 (琉球大学)

野生と文学

小学館の『日本国語大辞典』は、「野生」を、「動植物が、山野で自然に育ち、生きていること。人によって飼育慣らされたり栽培されたりしたものではないこと。またその動植物」と定義している。OEDは、動物と植物を分けて定義しているが、どちらも「自然の状態のまま」で生き、育っているもの、家畜化されていないもの、栽培されていないもの、と定義している。また、場所や土地については、「なにも栽培されていない、耕作されていない、それ故、荒れ果て、砂漠化し、荒涼としている」と定義している。いうまでもないことであるが、これらはアンソロポセントリックな定義である。

ゲーリー・スナイダーは、この定義をひっくり返し、〈1〉動物は主体的行為者、それぞれの天性に従って自然のシステムの中で生きているもの、〈2〉植物は、自ら繁殖し、自足し、生得の性

質と調和して繁栄する、(3)土地は、本来そこにある(べき)動植物が損なわれることなく存在し、十全に相互に働きかけ、地形は人間以外の力で形成されている、本来の純粹さを保っている、と定義する(*注1)。「野生」とは、換言すれば、「人間の干渉のない——自然の自立したプロセスまたは状態」を意味する(*注2)。

「庭園」、「盆栽」、「名所」のような「二次自然」(ハルオ・シラネ)とは、このような視点で見ると、「野生」(Wild)の状態を反転させた、人間の手によって「再構築され」、「飼いや慣らされた」自然を指す。それはまた、スナイダー流に言えば、「自然の自立したプロセスまたは状態」に人間が自由に、あるいは恣意的に介入した状態を指す。

日本文学の中で自然を表象する代表的なジャンルは俳句であろう。俳句の季語は、細分化された日本の四季を体系化しているという意味で、日本人のこまやかな自然観をよく示していると考えられる。しかし、ワイルドな自然は「自立したプロセスまたは状態」であると述べた瞬間に、季語は四季のこまやかな自然の様相を記号として単純化し、一つの体系に呪縛し、自然を「二次自然化」するもの、あるいはすでに記号化されてしまった約束事ではないということにわれわれは気づくはずである。言語化しようとした瞬間、あるいは表象への欲望が感じられた瞬間に、プロセスとしての野生はわれわれの言語体系をすり抜け、言語表象のはるか彼方へ消え去ってしまうのである。

時間があれば、宮沢賢治の「注文の多い料理店」を分析しながら、野生と「二次自然」、あるいは野生と文学について言及してみたい。

(*注1) Gary Snyder, *The Practice of the Wild*. San Francisco: North Point, 1990, pp. 9-10.

(*注2) ゲーリー・スナイダー「エコロジー、文学、そして世界の新しい秩序」山里勝己訳、山里勝己 他編、『自然と文学のダイアログ——都市・田園・野生』東京:彩流社、2004年、13-31頁

【ワークショップA 自然描写の近代と前近代】

■王 成(中国首都師範大学)

国木田独歩における自然描写

明治四十年「武蔵野」の<五>は文範として『文章世界』に再録した。明治四十五年富山房から出された『作文講話及文範』(芳賀矢一、杉谷代水合編)には「武蔵野」の<三>の一部を収録された。その後、「武蔵野」は自然描写の代表作として教科書の定番となった。原風景の武蔵野が消えた今でも、読書によって、独歩が描いた「武蔵野」はもはや日本人の心象風景となっている。日本文学における自然描写を考えると、「武蔵野」は、自然描写の近代化を示す有力なテキストである。人間と自然の調和を賛美した独歩の「武蔵野」は、環境文学という観点から、新しい読みを提出してみたい。

国木田独歩は自然文学について、ワーズワースの自然観に触発され、明治二十年代を流行した「帰省」の作者である宮崎湖処子が主張した「高尚、優美、偉大、豪宏」などを表現する文学に対して、「質朴なる生活天真の人情、健全なる肉体、神聖の労働、自由の乾坤暁星、山月、森林、溪流、郊野、などの自然美」を描く文学をあげた。故郷を樂園として描かれた「帰省」と対照してみれば、「武蔵野」は故郷を喪失した人が新しい故郷を発見した喜びを表している。武蔵野の空間を歴史と切れる意識で描くのではなく、「今の武蔵野」として、再認識するので、

都市と自然が融合する町外れの平和を描いたのは、近代的な文学空間を発見したのである。また、恋愛失敗をした語り手にとっての感傷の地を大自然の力を汲んで、心を癒す空間として、武蔵野に「首都市民の憩い」の場所を発見したのである。これは「帰省」で描かれた陶淵明的な農村的田園から自然と生活の詩趣を味わうことができる郊外へ視点を転換して、近代的な人と自然との調和の可能性を見出した。

「花鳥風月」的な紋切り型から離れて雑木林の美を描き出した「武蔵野」は、旧来の自然描写へ反発する意識が見られる。そればかりではなく、鑑賞する対象として自然を描く伝統的な自然観とはっきり違ったのは、「武蔵野」の自然描写は、人間の主体性を強調するのではなく、人間も自然の一部として、動的に、自然との一体性を求めようとしたのである。

独歩の自然描写の文体は宮崎湖処子の「帰省」と比較してみれば、漢文脈からの離脱は明らかである。漢語のもった東洋古来の自然観がワーズワースやツルゲーネフの翻訳文体によって、取って代わったのである。それによって、言文一致文体の持っている近代性が評価されているが、むしろ、漢文調の日記文を挿入することによって、独歩の教養に潜められている陶淵明などの東洋的自然観とは完全に切れていないことがいえる。そこから、「桃源郷」を喪失した近代人の自然観を再検討する必要がある。

■北川 扶生子（鳥取大学）

「自然の描き方」を習うー明治期の〈美文〉における自然描写ー

江戸時代から昭和初期にかけて、文芸の様々なジャンルが再編成されていく過程において、〈文〉という領域が存在し、大きな役割を果たした。大岡昇平によれば、〈文〉とは「原稿用紙二、三枚の短文で、措辞が整い、音読して耳に快く、美しいのが理想」で、彼の世代では中学校教科書の多くを占めていたという。学校教育だけでなく文学の世界においても、〈文〉は大きな位置を占めていた。文芸雑誌や学習雑誌の投稿欄は、様々な作文を、抒情文・叙景文・写生文・美文・紀行文・日記文・小品文などと、下位ジャンルに分類して募集・掲載している。たとえば、自然主義文学の牙城とみなされがちな雑誌『文章世界』は作文雑誌として出発しており、その誌面は、文話（文章に関する講話）・文範（作文の手本となる名文のアンソロジー）・文叢（読者投稿欄）に大きく分けられていた。作家の個人全集において、現代では「短編小説」「随筆」などに分類されてしまう多くの作品が、当時は〈文〉として書かれ、また読まれていたのである。

ジャンルとしての〈文〉の特徴および機能は、名文を学ぶことが作文上達の近道とする文範主義、古典的な修辞の型および語彙の保持、「文は人なり」という人格主義、実用的・社会教育的性格、名文選定による中等教育層への教養目録の提示、などが挙げられる。今回は様々な〈文〉のなかから、美文と美文調紀行文を中心に、明治期の作文およびその手本となった文範における自然描写を検討する。日本語による文芸の諸ジャンルおよびその文体が均質化する過程において、自然を描く表現とその発想も、和歌和文や漢詩漢文に典拠を持つ定型表現や美意識—たとえば、歌語・歌枕・枕詞・掛詞・序詞・縁語・本歌取・道行文など—とその練り直しから、眼前の個別的現象の観察と、言文一致体によるその報告へと変化してゆく。美文や美文調紀行文はこれまで、古典的レトリックと発想が残存した、過渡期の表現とみなされてきた。しかしこれらは、離郷や帰郷、旅行など、人々の移動の規模が飛躍的に増大する新しい時代の感性を反映したのではないか。

泉鏡花や三島由紀夫らの「美文調」も視野に入れ、言文一致体によって日本語の文章が失った詩的側面—韻律、集団性、古典的教養世界の感性など—を文学読者層に保持する器として美文が歴史的に機能したという見通しを持ちながら、明治期における美文による自然描写を検討したい。

■クリスティーナ・ラフィン（ブリティッシュ・コロンビア大学）

(日)恋、風景、訴訟—「経験」の再構築と阿仏尼の旅日記

『うたたね』『十六夜日記』は、それぞれ、阿仏尼の若いころの恋愛、そして後年の未亡人となってからの日々を描いており、阿仏の人生をはさみこんだブックエンドのようだといえる。『うたたね』『十六夜日記』のどちらにおいても、物語を進行させ、その書き手/主人公の窮状を強調し、宮廷物語や御子左家の和歌の伝統に結び合わせるための中心的な行為となるのが、旅である。本発表では、阿仏の旅が、その生涯と作品に果たした機能について、寺社や名所、地方、鎌倉への旅の場面をみながら考察する。

ここで問いたいのは、和歌のレトリカルな表現を歌枕にさぐるのではなく、名所和歌が阿仏の語りにおいて、どのような意図を強調するものとなっているのかということである。なぜ旅という行為が、彼女の人生を語るため必要とされたのか。阿仏は、実際の風景をどのように自らの表現に取り込んでいるのか。阿仏の旅は、中世の宮廷女性や宮廷文学のなかで、どのように理解されたのか。中世の女性が旅をしようと思いつのはなぜなのか、そこにはいったいどのような動機があったのだろうか。

ここでは、風景表現が、『うたたね』においては、失恋の痛手を受けた女性というイメージに、また『十六夜日記』においては、未亡人と母の自己犠牲のイメージに寄与していることを考察する。そもそも、阿仏が流浪する者、決然と母役割をまっとうする者であろうとすること自体、旅日記の表現史のなかから導かれたものであった。阿仏は、先行する物語、和歌、風景表現などから、自らを作品内の人物として創りあげ、文学的あるいは法的な目的のためのさまざまなイメージを提示したのである。

この再構築と自己表現の鍵は、土地にまつわる語りにある。旅という行為と旅の過程での風景から詠まれた和歌こそが、阿仏自身のイメージを構築する土台であり、阿仏の言おうとすることの基礎であって、ジョアン・スコットのいう「証拠としての経験」(the evidence of experience)をかたちづくっているのである。歴史的叙述において、経験は動かぬ証拠として提示されるのだが、そうしたものは阿仏のような女性たちの詩的な、多分に虚構化された自叙伝を考慮にいれるとすれば、問題含みなものとなる。さらに和歌の表現に基づく旅を記録する作品であれば、さらに問題は複雑になる。実体験の記録が女性史を再構築するための規範的な根拠となるとして、では、名所をたどる道筋にそって経験をたどっていく旅日記は、どのように扱われるべきだろうか。こうした自伝的な作品は、和歌表現の文学史に沿うように書き手の経験を仕立て上げているのだから、どのみち“事実”だとか“信憑性がある”とは言えないということになるのだろうか。本発表では、スコットの論じる歴史学における「経験」を阿仏の文学作品と阿仏の研究史をとおして、とくに風景の語りが人生をどのように再構築するのか(あるいはしないのか)という点から、これらの問いについて考えてみたい。

(英) Lovesickness, Landscape, and Litigation: Reconstructing “Experience” in Abutsu-ni’s Travel Diaries

Fitful Slumbers (Utatane, ca. 1283) and Diary of the Sixteenth Night Moon (Izayoi nikki, ca. 1283) can be read as bookends on the life of Nun Abutsu (1222–1283), the former documenting a love affair in her youth and the latter her late widowhood. In both works, travel is the central act that propels the narrative, emphasizes the plight of the author/protagonist, and ties her to a history of literary production, whether court tales or poetry of the Mikohidari lineage. This presentation will consider how travel functioned in Abutsu’s life and works, focusing on the descriptions in her diaries of trips to temples, famous sites, the provinces, and Kamakura. Beyond the rhetorical applications of waka in tracing poetic associations at utamakura, how do Abutsu’s poems at famous sites underscore the intent of her works? Why was the act of travel a convenient way to narrate her life? How might she have adapted the landscape

around her to suit her self-representations? How can her journeys be understood within the context of Japanese medieval courtier women and their literary production? What inspirations and motivations were there for medieval women who wished to travel?

I will argue that Abutu's descriptions of landscapes support an image of her as a lovelorn woman in *Utatane* and a self-sacrificing widow and mother in *Izayoi nikki*. These representations draw from a history of travel writing that enables Abutsu to position herself as either wandering waif or determined mother. Abutsu mines narrative, poetic, and visual precedents in order to reinvent herself in written form and present a cohesive image for literary, and later legal, purposes.

Key to this transformation and self-representation is the idea of narrative location. It is the act of the journey and the production of poetry based on sites along this journey that allow Abutsu to produce what Joan Scott refers to as the "evidence of experience," a foundation on which to build an image of herself and base her argument. Within historiography, experience is presented as the bedrock of evidence, which is problematic when applied to the poetic, often fictionalized, memoirs of women such as Abutsu, and more complex when these works document the conventionalized act of travel. If records of lived experience are the normative basis for reconstructing women's history, then how are we to treat travel diaries that string experience along a constructed route of famous sites? Are these autobiographical works any less "real" or "credible" because the author's experience must be tailored to suit a long literary history of poetic convention? Scott's questioning of what constitutes "experience" within historiography notion of will be taken up in the context of Abutsu's literary works and the history of her study, with particular attention to how narratives of landscape may (or may not) be employed in reconstructing a life.

■柴山 紗恵子 (コロンビア大学)

(日)『萬葉集』巻十と『六百番歌合』恋部における寄物詠

『萬葉集』において、天候や花鳥などのさまざまな自然現象は、詠作の直接の対象、もしくは心情を表出するための言葉のあやとして、数多く登場する。巻七は、このような自然の事物・現象を取り扱った歌を「雑歌」と「譬喩歌」(恋歌)に区分している。巻十は、これらの「事物詠」、つまり詠物と寄物詠を、その内容に従い、さらにそれぞれ四季に分類している。本論においては、巻十より幾つかの相聞歌(当巻では恋歌は「相聞」と呼ばれている)を選出し、分析する。これらの歌は、さまざまな恋の様相を叙述するのみならず、「春されば百舌の草潜」(1897)や、「秋の野の尾花が末の生ひ靡き」(2242)など、季節毎の、かなり劇的な自然のイメージ(物象)をも内包している。このように自然の物象を用いた萬葉歌の表現は、単なる「象徴」と見做す訳にはゆかない。このことは、古代・中世のヨーロッパにおいては、自然の物象は多くの場合、象徴言語として、さまざまな概念と一対一に対応し、換言され得るものであったことと相違する。例えば、古代ヘレニズム・ヘブライズムの文学作品において、「百合」は多産・繁殖力を暗示し、中世キリスト教世界では貞節・純潔を意味する。巻十の相聞歌に言及される花の呼称に関しては、単語のレベルでこのように固定された意味が託されることは稀である。

一方、西欧の伝統的な象徴言語に比べると、『古今集』における自然の事物は、『萬葉集』同様、詠み手の自由な解釈を可能にさせ、依然としてさまざまなかたちで映像化されるものとして機能していると言えよう。しかし、古今集の歌はそれがたとえ比較的古いとされるよみ人知らず詠であっても、それぞれの歌の内部の主題と言葉遣いは、ある程度規律化される傾向にある。「ほととぎすなくやさ月のあやめ草あやめもしらぬ・・・」(469)、「秋の田のほにこそ人を・・・」(547)など、自然の物象と概念とを結びつける媒体としての同音異義語の多用により、特に恋歌

における自然の物象と心情の関係は、かなり修辭的になっているものも多い。最後に、『六百番歌合』より「寄鳥恋」という題目のもとに詠まれた数首の歌を分析する。12世紀の歌人たちが、このいかにも萬葉風な題を、自らの歌学に関する博識と、歌人としての想像力を糧に、どのように取り扱ったか、という点について論じる。

(英) Nature and Love Poems in the Manyōshū and the Ropyyakuban Utaawase

In the Manyōshū (ca. 785), natural phenomena such as meteorological conditions and flora and fauna appear both as corporeal objects of composition and as rhetorical tropes. In Volume Seven, poems are classified as either miscellaneous poems 雑歌 or allegorical love poems 譬喩歌. In Volume Ten, these two classes of object poems 物詠・寄物詠 are further divided, based on their contents, into the four seasons. In this paper, I will examine some characteristic love poems 相聞 from Volume Ten, which in addition to describing various forms of love, contain dramatic nature images, such as “a shrike diving into grass” 百舌の草潜 in spring, and the “swelling and swaying upper fringe of pampas-grass” 尾花が末の生ひ摩 ？き in autumn. I argue that natural imagery in the Manyōshū cannot simply be described as “symbolic” 象徴的, because no fixed meanings can be attributed to particular images, unlike in the symbolic language prevalent in the European Middle Ages.

By comparison, the Kokinshū (905) shows a greater tendency towards the abstraction of nature and the codification of subject matter and diction, but natural phenomena are still subject to a variety of interpretations. However, I argue that in the Kokinshū, love poems with nature imagery (such as “lily leaves” あやめ草, “grebes” にほ鳥 and “reeds” 葦) appear increasingly rhetorical, due to the frequent use of homonyms that function as a link between natural objects and ideas. I conclude by examining a series of poems from the Ropyyakuban utaawase (1192-93) on the topic “love in association with birds” 寄鳥恋, and discuss the ways in which twelfth-century poets handled this ostensibly Manyō-style topic, drawing on their knowledge of waka lore and their poetic imaginations.

■新保 邦寛 (筑波大学)

風景描写から自然描写へ

柄谷行人『日本近代文学の起源』(昭 55)が言うように、ある先験的概念の表現であった風景描写を自分の見たものの報告に変えてしまったのがロマン派の眼差しであったにしても、そこに現前するのはせいぜい印象派風の風景に過ぎないだろう。それを自然描写にまで押し上げていったのは近代自然科学である。いわば観察し分類する眼差しの成立である。国木田独歩「武蔵野(明 31)では、〈檜の類〉や〈尾花野菊〉が捉えられ一見自然描写そのものに思えるが、その大掴みな表現のありようが示唆するように、問われているのは風景に他ならない。ところが「武蔵野」の影響が指摘される白柳秀湖「駅夫日記」(明 40)になると、〈岸に咲きみだれる藤袴の花〉とか〈竹垣の根には優しい露草の花〉とか自然の細部に拘った表現が見られ、明らかに自然描写を企てている事態が窺える。同時期の長塚節『土』(明 43)にしても、春の川岸に向けられた眼差しは実に行き届いていて、〈鼠麴草の花〉〈川楊の枝〉〈とだしば〉などが次々捉えられていくのである。こうした転換を促したのが近代自然科学であることは、例えば島崎藤村「雲」(明 33)のような試みを念頭に置くとよく分る。季節ごとに変化する雲の様態を観察し克明に分類記録したその試みが、ラスキン『近代画家論』に倣ったものであることは疑いないが、この書が、自然を科学的注意力をもって観察したものの手になる美術批評である点を忘れてはなるまい。

植物といえば既に本草学の伝統があり、それと深い交渉を持った短詩型文学の先蹤があるというのであれば、昆虫を考えればよい。短詩型文学のレベルでは〈コオロギ〉と〈キリギリス〉の区

別すらついていないのである(永橋禎子「キリギリス・コオロギ観の変化」平 21)。昆虫学の旗揚げに害虫駆除という大義名分が不可欠であったことは、瀬戸口明久『害虫の誕生』(平 21)の言うとおりであろう。ダーウィンのビーグル号による航海が、多様な種の発見は神の偉大さの証明なる動機付けなしにありえなかったのと同様だが、一度成立した昆虫学はそれ自体の体系性を志向しつつ発展していく。それはまた、観察し分類する眼差しが制度化される過程でもあり、その眼差しが教育を通して普及して行ったことは、昆虫採集の流行によっても窺える。正岡子規や芥川龍之介も昆虫採集に熱中した経験を持つ。

但しそうした経験が、植物の場合ように自然描写を羈制することにはなかなかならず、北杜夫『幽霊』(昭 27-28)以前の例を寡聞にして知らない。

■照沼 麻衣子 (立教大学)

近世期琉球の文学に見る自然描写—平敷屋朝敏『苔の下』を軸として—

一六〇九年(慶長十四・尚寧二十一)、琉球に薩摩が攻め入り、“古琉球”の時代に終焉が告げられ、琉球における近世期が始まる。それから一世紀後の一七〇〇年(元禄十三・尚貞三十三)、和文学者として王朝に名を馳せていた屋良宣易の家に、平敷屋朝敏という人物が生まれ、波乱に満ちた三十四年の短い生涯を政治犯として終えるまでに、『若草物語』『万歳』『貧家記』『苔の下』という擬古文物語を編むことになる。

本発表では、平敷屋朝敏の作品の中に描かれた自然のありようを探る。例えば、武士(サムレー)のたしなみであり、昇進の手段でもあった和文学の世界と、古琉球以来の伝統的な文芸で庶民にも親しまれた琉歌の間では、どのような差があるのか。また、擬古文の模範とする日本(ヤマト)の文学に描かれた自然を、擬古文に描き込むとき、どのようなニュアンスが伴ってくるのか。たとえば、那覇の仲嶋遊里を舞台にした『苔の下』の主人公の遊女であるよしや君が恋人と逢瀬をする「那覇の入り江」における月や、よしや君の部屋の前庭を彩る木々とそこにやってくる鳥などに着目し、登場人物たちの心の動きと連動する自然描写が物語の進行に深く機能していること、また、「桜」「萩」「卯の花」など、沖縄には馴染みのない植生を描くことで風雅の象徴としての四季を意図的に物語に織り込んでいることなどを示したい。

古来の信仰の場である御嶽(ウタキ)に樹木や石、水などが祀られていることから窺えるように、アニミズムが色濃く生きていた古琉球において、自然そのものは崇拜の対象であり、時として存在しているその領域は人間の踏み入れることのできない神域とされていた。そのような社会においては、自然は畏怖すべき対象であり、風雅の象徴とすることは多分に恐れ多いことではなかったか。よって、琉球文芸における風雅の演出としての自然描写の技法は、近世期以降の輸入文化であったと想定される。

また、琉球の風俗を紹介するためにヤマトで刊行された版本である太田南畝『琉球年代記』(一八三二)や米山子『琉球譚』(一八三二)の中の挿絵、葛飾北斎による八枚摺りの浮世絵「琉球八景」(一八三二)などの絵画資料を合わせ見、伝聞情報の琉球、あるいはイメージとしての琉球を視覚的に確認し、琉球とヤマトの双方向から“琉球の自然描写”にアプローチをはかる。

余裕があれば、琉球王朝復興の祖とされる羽地朝秀が策定した法令「羽地仕置」において奨励事項として記されている立花と茶道の隆盛についても触れてみたい。

■天満 尚仁 (立教大学)

対象・方法・外部としての自然

日本文学における表現は、常に自然と関係付けつつ成熟してきた。和歌は自己の感情を自然的な景勝物と重ね合わすことに眼目を置き、その美意識は俳諧・俳句という日本固有の形式に受け継がれている。連句は、一つの默契を交わした芸術的な連帯関係にある「連衆」から成

る「座」という空間を必要条件としている。他者を媒介とした問い掛け・応答によって一つの閉じた世界＝作品を仕上げていくのが俳諧である。この対話的形式を否定し、原初的な問い掛けである発句を紀行文の一表現に据えた松尾芭蕉を受け、単独の表現として俳句と改めたのが正岡子規である。この俳句という形式は高浜虚子によって「写生」という方法論が与えられ、花鳥諷詠がその基礎に置かれた。だが、単純に自然物を表現対象としてあるがままに写し出すのではなく、〈蓋し俳句は敘情詩なるもあり、敘事詩なるもあり又敘景詩なるもあり〉(「日本派時代」『日本人』明治 28・10)という多義性を持ち、表現自体が自然化したものが俳句なのである。俳諧(前近代)／俳句(近代)の表現的差異は、対象としての自然／対象化としての自然という、自然を巡る認識の方法の差異に対応している。寺山修司は短歌を七七という下の句の注釈的な反復による〈回帰的な自己肯定性〉を批判し、あえて数行を書かないことで円環的構造を回避する俳句を〈刺激的な文芸様式〉(柄谷行人・寺山修司「ツリーと構想力」『別冊新評』昭和 55・4)と述べ、俳句が、書かれていないものを想像の次元で示唆する開かれた表現であるところを指摘した。近代において寺山の指摘する俳句の機能を、美辞麗句(アフォリズム)が実現している。「綴方」という近代の教育制度は、明治・大正期の美辞麗句的な表現から、昭和の〈教育に於ける「生活」の重要性を主張する〉(『生活綴方』昭和 4・10)という生活そのものの描写へと変化していった。制度化された近代的思考によって、自然描写は風景の写生から風景の創出という意義に変容する。小林秀雄はゼザンヌに〈自然が彼の生存の構造と化してあるといふ様な趣〉(『近代絵画』人文書院／昭和 33・4)を見出し、柄谷行人は意識の外に位置する自然を〈生の感触を通してしか見出そうとしなかった〉(「意識と自然」『畏怖する人間』冬樹社／昭和 47・2 所収)ことを漱石に見出している。これら二つの批評に共通する存在論的な自然観は、表現の外部に位置する「自然」という近代特有の自然描写を提出している。

■ピーター・フルキッガー (パモナ大学)

(日)徳川思想における自然の商品化

荻生徂徠(1666-1728)は、儒教を、徳川社会の改革に用いられる、人為的に生み出された統治のツールであると定義した。しかし、多くの後世の思想者は、徂徠思想のある一面を受け入れながら、儒道の実用的な利益(＝経済)に関する考察が限られていると考えた。

徂徠の支持者であった文人たちも、また批判的であった国学者達も、自らの学識を政治に適用することの非現実性を自覚しており、詩は「無益」の文化の追求であると考えた。また、徂徠のプラグマティズム(実用主義)は、徂徠が疑問を抱いていた徳川社会の特徴－特に、商業経済の発展－に関して効果的ではないと考える批判的な思想家もいた。

本発表では、太宰春台(1680-1747)、本多利明(1744-1821)、海保青陵(1755-1817)というような人物が、政治組織を適切に利用することにより、商品資源としての自然環境に関して新しい概念を発達させながら、徂徠の政治についての視座をどのように維持し続けたかを検討したい。

また、このようなプロセスが、日本の〈野生的〉な周縁地域の支配と文化変容によって世界中で領土を拡大していったことと、どのように同一視されたかについても考察を深めたい。

(英)The Commodification of Nature in Tokugawa Thought

Ogyū Sorai (1666-1728) defined the Confucian Way as a humanly created tool for governance that could be used to reform Tokugawa society. Many later figures, though, found limitations in his view of the utilitarian benefits of the Way, even while adopting certain aspects of his thought. Both his kokugaku opponents and his bunjin followers found it unrealistic to apply their learning to government, and instead embraced poetry as a “useless” cultural

pursuit. At the other extreme were those who thought that Sorai's pragmatism did not go far enough, especially in terms of responding to the development of a commercial economy, a feature of Tokugawa society that Sorai regarded with suspicion. This paper examines how such figures as Dazai Shundai (1680–1747), Honda Toshiaki (1744–1821), and Keiho Seiryō (1755–1817) continued Sorai's focus on governance, while developing new ideas about the natural environment as a source of commodities that could only be exploited through the application of proper political institutions. It also looks at how this process became identified with the expansion of Japan on the world stage through the taming and cultural transformation of Japan's wild periphery.

【ワークショップB 大衆文化の表象と環境】

■片山 宏行（青山学院大学）

名作が浪曲化するとき——菊池寛「父帰る」と「恩讐の彼方に」——

菊池寛の「父帰る」(1917<大正6年>『新思潮』)が1920年に市川猿之助の春秋座によって演じられ、一躍脚光を浴びたことは、菊池自身の述懐や同時代作家らの回想によって、すでに近代文学史の上では周知のことがらに属する。またその後1923年には有楽座と公園劇場とで同時に上演された本作について、山本有三は「君をブルジョア作家など云ふが、『父帰る』などをプロレタリア文芸と云はずして、何をプロレタリア文芸と云ふのか」と菊池に言い、久米正雄は「君もう『父帰る』は古典だね」と述べたという。この知己の感想を、「両方とも、ひいきの僻目だらう」としながらも、「が、私は『父帰る』に就ては、多少の自信を得た。十年や二十年の後まではきつと残るに違ひない。少くとも、私の作品の中では、一番最後に亡びるものだらうと」(『父帰る』の事)と記している。

ところで本作は1925年に Glenn W. Shaw の手によって英訳され、『Tojuros Love And Four Other Plays』(北星堂書店)に収められる。そしてこの一本を閲読した W B Yeats は1926年秋に彼のもとを訪れた矢野峰人に、「自分が今最も深い興味を以て眺めて居る戯曲家は世界に菊池とピランデルロ二人あるのみだ」(『去年の雪』)「彼の傑作をどしどし翻訳して見せて貰いたいものだね」(『片影』)と激賞したという。また、この直前には『モーニング・ポスト』紙が「A DRAMATIST OF JAPAN」と題する社説(1926年3月31日)でやはり Shaw の翻訳作品を紹介しつつ、「菊池はバーナード・ショウやゴルスワージーの影響を受けているとあるが、この脚本中にはそうした跡を認めえない。むしろ日本劇そのものの伝統を継承しているかに思われる」とし、「もし菊池のような劇作家が尚たくさんいるならば、日本はその現代劇を誇ってよい。ショウやゴルスワージーから何も学ぶ必要はない」と菊池の戯曲を高く評価した。

さて、時は下って1942(昭和17)年、粗末な紙に印刷された『浪曲名人集』なる冊子が「慰問版」と銘打って出版される。演目は八つ。このなかに廣澤虎造の「森の石松」と並んで、菊池の「父帰る」が天光軒満月の口演で収められている。先廻りをして言えば、それまで文学の精読者が一致して高く評価した戯曲「父帰る」は、戦時下という環境において、浪曲という形で大衆化(流布)していたのである。また、Glenn W. Shaw の翻訳には、やはり菊池の代表作である「恩讐の彼方に」(「敵討以上」)も収録されているが、こちらも1928(昭和3)年に浪曲化されている。

以上のような事実をふまえつつ、いわば名作の<変容・命脈>といった切り口で与えられたテーマについて提言できればと思う。

■中村 優子（立教大学）

なぜ「空」が語るのか？：「空」が表象するもの in ポップカルチャー

近年の日本のマンガには「空」がよく登場する。「空」を描いたコマが頻出するのである。なぜか？世界的にその存在が知られ、その他の文化圏のコミックスに大きな影響を今も与え続けるアメリカンコミックス、世界でも人気の高い「タンタン」に代表されるフレンチーベルジャンコミックス、および香港コミックスそれぞれの、典型的なコマ割りと比較してみると、その異質性が浮かび上がる。

本発表では他の文化圏のコミックスとの比較から、マンガがストーリー理解上、非効率的と思われるコマをいかにふんだんに使っているか、そしてそのコマに描かれる画像表現に、「空」がいかに多く使われているかを、数々の具体的な例と共に紹介。マンガの中の「空」が語るものは何かを探り、表象としての「空」の役割を浮き彫りにする。そして、何かを表現する媒介物として「空」を利用している例を、映画など、イメージとテキストが同時に見る側に与えられるという条件を、マンガと共有しているメディアの中からも紹介し、日本のポップカルチャーの中の「空」が表象するものとは何かを考える。

■丹羽 みさと（立教大学）

蔵書印のゾウ

和本にはしばしば、蔵書印が捺されている。その多くが長方形か正方形、楕円形か円形をしており、「某之印」といった文字が彫られている。中には象のような動物が刻まれている蔵書印もある。

古来象はキサと呼ばれていたが、蔵書印が多く作られるようになった江戸時代には、基本的にゾウと呼ばれていた。蔵書印に象が描かれるようになったのも、この呼称を洒落として利用し、「某所蔵」という印文の代わりに、「某(象の絵)」としたのだろう。

現在知られている象の蔵書印は、板坂卜斎(一五七八～一六五五)の「如春(象)」、石塚豊芥子(一七九九～一八六一)の「豊芥(象)」(二種)、淡島椿岳(一八二三～一八八九)の「吉凡(象)」、山口豊山(?～一八九七頃)の「豊山(象)」、三村竹清(一八七六～一九五三)の「竹清(象)」、咸亨堂(?～?)の「骨董舎(象)」の七種類である。このうち、生没年不詳の咸亨堂、昭和まで生きた三村竹清はさておき、江戸時代を生きた卜斎、豊芥子、椿岳、豊山の四名も、興味深いことに象を見た可能性がある。

象は日本列島の在来種ではないが、応永十五(一四〇八)年から数度、渡来している。勿論生きた象である。江戸時代に限れば、慶長二(一五九七)年、慶長七(一六〇二)年、享保十三(一七二八)年、文化十(一八一三)年、文久三(一八六三)年の五回を数えることができる。特に有名なのが広南から吉宗に贈られた享保の象であろう。この象は街道を踏破し、浜御殿で飼育され、江戸城を行き来していたことから、多くの人々が目にしていた。二代目団十郎の十八番「象引」や、『象志』(一七二九年)など、享保の象をモデルに様々な作品が発表されているのも、そのような理由からであろう。この象は蔵書印には反映されなかったが、それ以外は象が渡来した時期に蔵書印が作られている。象の渡来に先の四名が関心を寄せ、その結果、象の蔵書印が作られたと思われる。

今日、象を見るには動物園に行けばよい。動物園はその生態を学ぶ生涯教育施設として、また絶滅危惧種の繁殖施設として、単なる展示施設以上の役割を担っている。しかし、人々が動物園を訪れる最大の理由は、動物を「見たい」と思うからなのではないだろうか。間近に動物を見るという経験が、彼らへの理解を深め、その先へとつながっていく。象の蔵書印にも同じような環境に対する関心への萌芽を見ることができるのではないだろうか。

■波戸岡 景太（明治大学）

日本の森のあいまいな「私」：大江文学から、宮崎アニメ、『ひぐらしのなく頃に』まで

大江健三郎による60～70年代の純文学作品から、宮崎駿による80～90年代のアニメーション作品、そして00年代をとおして一大マーケットをなしたライトノベル（通称ラノベ）に至るまで、本報告では、ここ半世紀のあいだに一定の文化的影響力を及ぼしたいくつかの物語に描かれた「森」の表象に注目する。それらを系譜学的連続性において俯瞰するとき、まず明らかになるのは、「現実の森」に対する喪失感と、「神話化された森」への憧憬が、いずれの作品においても、ある種の危うさのうちに表裏一体となっているといった事実だろう。仮に「自然との共生」を前近代的な日本の自然観として措定し、だから近代化とは「私」が「自然」に対して確固たる対立構造を築き上げていくプロセスだったのだと主張してみると、それでは近代以後、特に高度経済成長以降の現代日本文化を考えると、「私」と「自然」の関係はどのようなものになってきたと言えるのか。緑であれ荒野であれ、すべては都市生活者のための記号に過ぎないとするアマチュアなポストモダニズムの見解はさておき、20世紀後半から現在に至るまでの状況を環境意識史という観点から概観するならば、「私」という存在の複層化、あるいは「私」という主体に対する「メタ」な意識の増大、あるいは生態系という概念の通俗化がもたらす「私」という存在の絶対的な相対化といった現象は、「私」と「自然」という関係性の成立基盤を「私」の側から無効化していったばかりか、「環境」という概念が「自然」の上位概念であるかのように語られ、「エコ」という言葉があたかも21世紀版の「大きな物語」であるかのようにもてはやされるといった「環境重視」の状況に後押しされるかたちで、「自然の中の私」という感覚を半ば回復不可能なものにしていった。一方で、こうした事態は、そもそも現代作家たちがその物語の制作過程で、むしろ積極的に望んだ展開でもあった。彼らが「私」という主体を疎んじ、「自然」よりもシステムとしての「環境」を目指した大きな理由のひとつには、やはり近代日本文学における「私」の在り方への懐疑があったのだろう。だがやがて、「私」の解体を目指した語りも、「環境」への意識を強めた物語世界も、どちらも類型化をひきおこしていく。日本の森を舞台とする物語をあらわしながら半ば必然的に「私」の崩壊を推し進めていった現代日本文学／文化の限界と可能性。それらをポストモダニズム理論に代表される政治的な（無）意識史としてではなく、あくまでも環境意識史の観点から考えてみるために、本報告では、大江文学からライトノベルに至るささやかな見取り図を示してみたい。

■浜田 雄介（成蹊大学）

捕物帳と環境 —岡本綺堂「半七捕物帳」—

今日においても根強い人気を持つ捕物帳ジャンルの濫觴とされる岡本綺堂「半七捕物帳」について考察する。捕物帳は、江戸時代を舞台とし、謎解きをドラマツルギーとする点で、時代小説と探偵小説の融合のように位置付けられる。図式的な整理として間違いではないが、「半七捕物帳」による捕物帳の創始は、日本において創作探偵小説が市民権を得る以前であり、谷崎潤一郎による犯罪小説が試みられていた時期に重なる。

ホームズ譚から刺激を受けた岡本綺堂は、舞台を江戸にとり、過去の犯罪をめぐる半七老人の話の青年時代の「わたし」が聞き、その「わたし」が後になって文章に書き起こす、という形式を採用した。その結果、物語世界には、既に失われた江戸が、失われつつある様相を秘めつつ、色鮮やかに浮かび上がることになったが、そこにはまた、人間をとりまく環境と、人間の営みである物語とが、相互に働きかける興味深い関係が描き出されることになった。

たとえば、季節。多くの作品で、「わたし」はある季節に半七老人を訪ねる。そして時候をめぐる雑談の端から、そう言えば、あの事件が起きたのはこんな季節の頃だったという具合に、過去の事件が掘り返されてゆく。時代と共に激しく変貌した東京で、現在と過去を結びつける装置として「季節」が使われるのである。そして、季節の中で展開し、忘却された事件と、たえず変化し

つつ毎年繰り返される四季の風情とが対峙する中に、読者もまた巻き込まれて行く。

たとえば、動物。動物との関わりはポオ以来の伝統でもあるが、いくつかの作品で、人間の犯行としては不自然な謎が描かれる。謎解きの結果にはさまざまな幅があるが、しばしば、その頃はそのあたりにそういう動物が住んでいた、という種類の但し書きが挿入されている。かつて推理を攪乱させたものとして動物が使われるのだが、それは同時に、都市化にともない、動物と人間との関係が変化しつつある語りの時代を作品に浮かび上がらせる。

発表では、これら、作品に描かれ、また物語を動かすいくつかの環境的要素について考えたい。捕物帳は、江戸というエコロジカルな都市を描くことで、生態系に対する想像力を活性化させてきたとも言えるだろう。環境あるいは自然、季節の表現は、すべての捕物帳において同じように特徴的だったわけではないが、後に白石潔による「季の文学」という命名が人口に膾炙するほどには、表現上の必然性があったと論者は考えている。もしも時間的に余裕があれば、以後の他の作家による捕物帳の試みにも触れてみたい。

■藤井 貴志（立教大学）

村上春樹『1Q84』とコミュニンの系譜

「村上春樹は『1Q84』についてのインタビュー（『毎日新聞』2009・9/17）に答えて、1980年代に至る精神史を次のように語っている——「カウンターカルチャーや革命、マルクシズムが60年代後半から70年代初めに盛り上がり、それがつぶされ、分裂していきます。連合赤軍のようにより先鋭的な、暴力的な方向と、コミュニン的な志向とに。そして連合赤軍事件で革命ムーブメントがつぶされた後は、エコロジーやニューエイジへ行くわけです。連合赤軍に行くべくして行ったと同じ意味合いで、オウム的なものも生まれるべくして生まれたという認識があります」。『1Q84』には、山梨県の山中に集団で自給自足的な農業を営む「さきがけ」というコミュニンが物語の重要な舞台として登場する。もともとは「七〇年安保」の挫折から誕生したこのエコロジカルな共同体は、革命思想を先鋭化する少数派メンバーによる「あけぼの」と分離するものの、どこかカルト的な危うさを纏い付かせている。資本主義的なシステムに対する反体制的なユートピア運動が不可避に暗転していく様を描きつつ、それへの抗体となるようなオルタナティヴを模索すること。『1Q84』には、コミュニン思想からも、あるいは資本主義的なシステムからも距離を取り、それに対抗するような契機が様々に織り込まれている。

ところで、このようなコミュニン思想の系譜を日本近代文学史の中に見出すことは難しいことではない。たとえばW・モリスの小説『ユートピア便り』は明治末から社会主義者やアナキストに愛読されていたし、大正期には武者小路実篤の〈新しき村〉の実践があり、モリスに強い影響を受けた佐藤春夫の「美しい町」や宮沢賢治にまで連綿とユートピア的コミュニン思想は持続していく。やがて五・一五事件へと帰結する橋孝三郎らの農本主義（愛郷塾）に顕著なユートピア／デストピアの反転も含め、『1Q84』もそのような系譜の中で考察される必要があるだろう。

現在、資本主義の行き詰まりに伴う急激な格差社会の到来と共に、既存のシステムに拠らない新しいライフスタイルを模索する対抗運動が多様に生起してきている。ロハス、帰農などのエコロジカルな運動は勿論だが、高円寺のリサイクルショップ「素人の乱」に代表される地元に着した相互扶助的なネットワークも見逃すことはできない。そう考える時、『1Q84』において「さきがけ」というコミュニンあるいは「深い森の中にいるリトル・ピープル」に対抗する物語の舞台（拠点）が「高円寺」という小都市に設定されているのは極めて興味深い。『1Q84』を起点に、ユートピア的なコミュニン思想を批判的に現在へと架橋する幾つかの回路について思考したい。

■山本 洋平（立教大学）

加藤幸子の多声的世界—『ジーンとともに』論

アニマル・ウォッチングやペットブームなどがいまや社会現象にまでなっている昨今、人間にとって動物とは何かという問題がエコクリティシズムの危急の課題となりつつある。この問題は、文学はいかにして「人間中心主義」を超越できるかという問題系に端を発するものであり、また、政治・メディア・企業が喧伝するような(人間中心主義的)環境志向とは次元を異とするネイチャーライティングは可能かという問題を誘発するものである。

以上の問題意識のもと、加藤幸子の『ジーンとともに』(1999年、のち『心ヲナクセ体ヲ残セ』角川文庫)を論じる。本作品は、鳥の視点から生命のありかたを描く実験的小説である。もちろん動物を主人公とする小説は古今東西にあり、日本近代文学に限っても夏目漱石『吾輩は猫である』や中勘助「鳥の物語」を挙げることができるが、『ジーンとともに』ほど徹底的に動物の視点を再現しようとした小説は稀有であろう。これほど意識的に人間中心主義を相対化しようとする作品はこれまでなかったからである。

『ジーンとともに』の主人公である「私」は、その分身である「ジーン」(=遺伝子)と対話しながら成長していく。そこで注目すべきなのは、慎重に「擬人化・人格化(anthropomorphism)」を避けながら語られている点である。ファンタジー風になりがちな鳥から見た世界が、いくつかの工夫によってリアリズムとの均衡を保っており、その均衡が生命のありようの透徹した合理性を際立たせている。

加藤幸子という作家は、かつて「都市は自然に似ている」と述べたように、都市／自然という二項を必ずしも対立的に考えていない。人間／動物、人工／天然といった二項についても同様であり、それらの対立軸を越境するような多声的な生物世界を描く作家である。以上の議論を展開すべく、『夢の壁』で芥川賞を受賞する以前の最初期作品「野餓鬼のいた村」(1983年)、および『ジーンとともに』以降の達成点でポリフォニックな生物世界を描く「空地」(2005年)にも言及したい。

■若松 伸哉 (青山学院大学)

地方／自然としての〈日本〉—昭和初期における民謡・映画を中心として

一九三三(昭和八)年、小林秀雄は「徒に日本精神だとか東洋精神だとか言ってみても始りはしない。何処を眺めてもそんなものは見附かりはしないであらう、又見附かる様なものならばはじめから捜す価値もないものだらう」(「故郷を失った文学」と述べている。小林のこの言は直接的には同年発表されている谷崎潤一郎「芸談」における〈日本回帰〉の表明へと向けられているのだが、谷崎個人の問題にとどまらず、同時代の民衆のなかにも〈日本回帰〉の意識があらわれている。

その例の一つとして、昭和初年代における民謡の流行が挙げられる。この時期、民謡の流行とともに多くの関連本が出版されているが、例えば西川林之助『民謡の本』(一九三三・四、東北書院)が民謡の〈地方性〉に言及する一方で、「民謡は民族の謡であると云ふ事が云へる。／つまり日本民族と云ふ血の流れの中から出る人間的感情の発露があるわけである」と述べるように、民謡を〈日本民族の歌謡〉として日本民族全体へと昇華する発想のなかに、そうした〈日本回帰〉の意識を見出すことができる。

そしてここで注目したいのは、昭和初期における〈日本回帰〉の問題が、今見た民謡ブームに見るように、〈都会〉に対する〈地方〉という構図で表出されている点である。近代(西洋)化した都市ではなく、古い自然・文化を残す地方にこそ日本本来の姿を見出していこうとするこうした意識は、ドイツに日本を紹介する目的で制作された、アーノルド・ファンク監督の映画「新しき土」(一九三七年)にも顕著に見られる。この映画は、宮島や阿蘇山、松島などの日本各地の景勝地のカットを織り込みながら、日本の特質を〈自然〉をもって描き出しており、とりわけそこで象徴的な存在になっているのが富士山である。

本発表では〈日本回帰〉という同時代の文脈のなかで、西洋化した都市への対抗としてせりあ

がってくる、地方・自然といった概念およびそれを拡大させていく大衆的な文化装置(民謡・映画など)に焦点を当てたいが、同時にまた、富士山への嫌悪が示されている、石川淳「マルスの歌」(一九三八年)や太宰治「富嶽百景」(一九三九年)といった同時代の文学作品にも言及したいと考えている。

【シンポジウム2 中央と周辺】

■大屋 多詠子 (青山学院大学)

京伝・馬琴作品における辺境 ―鬼界島と外が濱―

日本の両端にある辺境と考えられていた鬼界が島と外が濱が、江戸時代の文学作品、特に山東京伝・曲亭馬琴の作品においてどのように扱われているかに注目したい。

鬼界が島は俊寛らが流刑された地として有名である(平家物語・謡曲「俊寛」・浄瑠璃「平家女護島」等)。また源為朝にも鬼界渡航説がある(本朝神社考)。曲亭馬琴の読本『椿説弓張月』(文化四・五年刊)では、「奇界乃奇怪にて、この国奇怪の事多かり。後に鬼界と書によりて、鬼が嶋とも唱ふめり。みな南嶋の総名にて、今なべていふ琉球也」というように琉球を含む南嶋の総称を鬼界とみなし、為朝の琉球渡航を描いている。馬琴は琉球について「奇怪の事多かり」と記すように、怪異の趣向を多々盛り込んでいるが、その基本的な理解は産物の豊かな地というものである。また『弓張月』の為朝は、琉球渡航以前に三宅島から海上百里ばかりのところにあるとする「女護島、鬼が嶋」へも渡っているが、女護島の産物を詳述、この二島について「原日本の内なるべけれど、人怕れてゆくものなければ、我に益なく彼に損あり」(後編卷一・十六)とも述べており、ここからは辺境をただ未開の恐い場所とするのではなく、珍しい産物のある地とする意識が読み取れる。

鬼界が島と対で日本の両端にある辺境と考えられていたのが外が濱で「左の御足にては、外浜をふみ、右の御足にては、鬼界島をふみたまふ」(曾我物語・卷二)や、「東は奥州外ヶ浜、西は鎮西鬼界が島」(歌舞伎・矢の根)などとみえる。外が濱は津軽半島の陸奥湾沿岸を指し、謡曲「善知鳥」で知られる。山東京伝の読本『善知安方忠義伝』(文化三年刊)では、外が濱の獵師善知安方は、故君平将門の遺児らの謀反の企てを諫めて死に、靈魂となってなお主君を諫める。安方の父も将門の謀反を自害を以て諫め、そのために安方は追放され外が濱の獵師となったのであった。安方は忠臣でありながらも、猟による殺生の報いで地獄で化鳥悪獣に責め苛まれる。本作では謡曲を引継ぎ、辺境での生活の貧しさを描写することで報われない忠臣の死を憐れみ、その孤忠を称える効果を上げている。

辺境を京伝・馬琴が取り上げていることは、当時の海防・異国への関心を反映しているが、その描写において未開の恐い、あるいは寂しく貧しい地との近世以前の認識を引き継ぐ一方で、未知の国益を秘めた地との捉え方が現れていることがわかる。

■加藤定彦(立教大学)

「奥の細道」に東国の歴史を探る

日本列島は東北へ向かって漸次開発が進められた。その先兵が少彦名であり、倭建命、義経であった。芭蕉の「奥の細道」にも、そうした痕跡を探ることが出来る。

福島市郊外の文字摺石を見た後、芭蕉は佐藤庄司の旧跡を訪ね、「飯塚の里鯖野と聞き、尋ねたづね行くに、丸山といふに尋ねあたる。……ここに義経の太刀、弁慶が笈をとどめて什物とす。(句略)五月朔日のことにや。その夜、飯塚に泊まる。温泉あれば湯に入りて宿を借るに、云々」と記している。

佐藤氏は東国に下った藤原秀郷の末裔で、佐渡領主のとき改称、信夫地方の領主に転じた

後、磐城氏とともに平泉の藤原氏と縁戚関係を結び、東北に堅牢な勢力を築いた。

庄司の館(大鳥城)のあった地は地勢の上から丸山と呼ぶが、「丸」は古代朝鮮語で墳墓や城を指し、樺原市の丸山古墳、青森市の三内丸山遺跡、四国の山名に多い「一丸」(「一森」も多い)、出雲地方に多いカンナビ山、紀州の牟婁(むろ)などと同義である。小河川に挟まれた扇状地の微高地が多く、稲作に適し、飯塚の地名の謂われもそこにある。

飯塚(現、飯坂温泉)では「鯖湖の湯」が古い。磐城の湯本にも「佐波古の湯」と温泉神社(式内社)があり、大己貴と少彦名を祭神とする。鳴子温泉を「沢子の湯」と称したとする説もあるが、サワコは沢の東北方言だろう。アイヌ語の「ナイ」に通じる稲作の適地で、穀物の種をもたらした少彦名に縁の深い、人々が生活を営むに相応しい場所であった。

ところで、芭蕉は「奥の細道」の旅に出て間もなく室の八島を訪れる。煙を詠むことで知られる歌枕で、下野国庁の北約一里にある大神(おおみわ)神社(栃木市惣社町)の境内にある小池に島を幾つか築き、関東の有力な神々を祀る祠を配置し、それを室の八島とするのが通説だが、後世の好事家によるミニチュア-サイズの捏造であろう。結論のみを記すと、国庁から指呼の距離にある筈の「室の八島」は、思川と姿川に挟まれた百基以上の飯塚古墳群(小山市飯塚)を指したもので、「室」は「墳」で、川霧を煙と詠んだのであろう。

『源平盛衰記』では信西の係累が「室の八島」に流されたと記され、『義経記』では奥州下りに際し、義経は金売り吉次に「室の八島」で待てといい、信西の係累、陵の館を焼き払う。同地域には、判官塚古墳や吉次の墓と伝える遺跡なども地図に検出できる。

■ケヴィン・M・ドーク (ジョージタウン大学)

「エコクリティシズムの対処的方法:保田与重郎の自然観 と辻野久憲の自然観」

エコクリティシズムの必然の前条件の一つは、自然という概念の理解です。その自然の概念の理解様式によってエコクリティシズムの意義か無意義かが成り立つ。昭和10年頃の日本文芸者の中では、自然に対する理解様式が主に二つの方向に分けたようです。一つは保田与重郎に、もう一つは辻野久憲に象徴されることと考えられる。大岡信によると、「保田は. . . ‘神’という言葉を持ちだそうとはしない。代わりに‘自然’が登場する。超越的な人格神のない世界で精神の問題をつきつめて考えようとする、宗教的・倫理的な立場よりも美学的な立場に近づくということを保田氏の例はしめしていると言えよう. . . .ただ保田氏は、当然のこと、‘自然’を‘神’に匹敵する絶対的超越的心理にまで高めなければならなかった。それは、人格神による統一がない場所で統一的な世界像を形造ることを願うかぎり、必然的な成り行きだった。」それに対比して、辻野久憲の自然観は、保田の自然観と逆方向に、目の前の風景を観測してから万物作り主としての人格神に遭遇する場所としての自然の理解です。そういう訳で、辻野は、自分の死の直前に書き上げた散文体詩文「海辺日誌」は、保田の美学よりも周辺の場所からの一つの祭祀としてのエコクリティシズムの可能性を示している。

■小林実(十文字学園女子大学)

日本橋の夢

大正三(一九一四)年九月に千章館から上梓された泉鏡花の『日本橋』は、東京市日本橋区桧物町から西河岸町あたり(現在の中央区八重洲一丁目)を舞台とする花柳小説である。四人の男女が織りなす恋愛模様は、やがて一人が出奔、一人が発狂、ついには火事と血みどろの刃傷沙汰でクライマックスを迎えるという筋立てであるが、そのいっぽうで、二人のヒロイン滝の家清葉、稲葉家お孝は、土地でも評判の芸妓で誰知らぬものではなく、お孝の家とその近所は怪談のいわくつきで端唄にも歌われるというように、作中人物どうしのドラマの周囲には、彼らを注視する地域の住民たちの濃密な社会空間、すなわち長谷川時雨が随筆『旧聞日本橋』で、明治十年代のこととして活写したような、隣近所が職縁や血縁でつよくむすびついでい

たゲメインシャフトの面影が描かれているのである。

また、この作品が発表された大正三年は、天皇即位を記念して、三月に上野公園で東京大正博覧会が開催され、七月には第一次世界大戦がはじまり、国の内外で時代が大きく動きはじめる年でもある。日本橋地区でも、すでに日本橋そのものが三年前に、木造から花崗岩製に架けかえられているが、九月に三越本店がルネサンス様式の新館を完成させ、十二月には外堀の向こう側に東京駅ができあがる。つまり、作品の舞台となる地域では、それを囲む川と堀の対岸まで「帝都東京」の威容が迫ってきていたのである。

もちろん、そうした現実世界の気配を直接的にえがくリアリズムは、作者の求めるところではない。『日本橋』にとりいれられたのは、新劇のヒット曲「カチューシャの唄」ではなくて、同じくこの時期流行した奈良丸くずしで、赤穂義士大高源吾が両国橋で其角と句をかわしたという逸話を唄った「笹や笹」。唄う子どもは六代目菊五郎の声色である。

だが、現実の日本橋地区は、他地方出身者の流入と地元出身者の流出によって、急速にゲメインシャフトを失いつつあった。それを象徴するかのように『日本橋』では、清葉の滝の家が焼失し、お孝はかつての愛人伝吾を殺害して自身も服毒自殺し、お孝の恋人葛木はドイツへ留学して行ってしまう。ひとり残った清葉が、お孝の稲葉家に移って一家の芸妓を十三人も抱えるという結末が、自身も田舎江戸っ子のひとりである鏡花の夢であることは疑いない。

■松田 宏一郎（立教大学）

近世言語観における「自然」と「作為」

国学は通常、儒学、特に徂徠学における聖人による「礼」の制作の議論に対抗して、神々の生み出した世界の中で自然に純粋な感情共同体をつくっている人間の本来のあり方を、探し求める思想の系統として見られていると考えられる。しかし、国学者の中にも、人間と「禽獣」の断絶に積極的な意味を見いだす立場がある。たとえば、言語は神が与えたものであって、「自然」な発生さらには発達ではないという主張である。たとえば、賀茂真淵は日本語の五十聯音にも「自然」の音声を見だし、その故に正しい、とするが、本居宣長は、自然の音を「正音」とは考えない。宣長が五十音図の「自然」性をあっさり否定し、五十連音の図は悉曇字(梵字)からつくられた、ある意味で不自然な整理であると述べている。音が訛ることは「自然」かもしれない、しかしそれは「正しい」ことではない。神が与えた言葉はいわば perfect language であって、歴史的な変化はどうてい正しい変化とは認めがたいとする。宣長にとっては外国の悪しき風俗や言語もまたその「自然」ではあるが、「正しさ」とは無関係である。いわば不作為という意味の自然性自体には意義を見いださない点に宣長の主張の特徴がある。「神の道」はその「自然」を断ち切るものとしてある。

言語の起源と「言霊」のありようを巡る対立的議論は、一八世紀ヨーロッパにおける言語起源論争、たとえば、詩が「自然」に発生しないと考える限り、詩の起源を神に求めねばならない、という議論に対抗して『言語起源論』を著さざるを得なかったヘルダーを取り囲む状況を想起させる。人間を禽獣状態から離脱させる決定的要素としての言語は、いったい人間に内在しているのか、あるいは何かの理由で突然外部からもたらされたのか、という疑問に対する回答が、国学者陣営内部で分裂している。

この対立は、この後も継続した。一九世紀にはいると、橘守部(一七八一—一八四九)の「此五十連音は誰が作など云ふべき物にあらず。神世の初より天地万物の声の限りは茲に尽くして其方位等次は如此次第せるものぞとて自然に伝来せし物にぞ有ける」という主張、あるいは林圀雄(一七八〇—一八三九)は、「言霊もよ、五十連の声もよ、この声はも天地のおのずからなる声にしあれば、これは彼をまねばず、彼はこれをまねばずして、おのもおのもわがもとよりの声になもありける。彼天地のはじめのときには、海山も鳴りほえ草木ことごとく物いひ、鳥獸も言いひ、魚虫も言挙げし、……」といった主張に見られるように、言語自体に人間固有の社会性

を見いだす必要を求めない議論もあった。他方、鹿持雅澄(一七九一—一八五八)のように「草木成(ことごと)くに能く言語(ものいふこと)あり」(書紀神代卷)をはっきり否定する議論もある。もちろん神と「自然」とを必ず対立させなければならないわけでもなかった。また平田篤胤の場合は神による天地創造の中に言語も含まれていた。

本報告では、「言語」を、「自然」と「作為」のどちらの領域に囲い込めるのかを争った国学者の論争を概観したい。

■安原 真琴 (立教大学)

露伴の都市計画論が現代に問いかけるもの

幸田露伴は明治三十二年から三十四年にかけて『一国の首都』なる都市計画論を著した。そしてそれは、過去の古びた概論でも、文学者による理想論でもなく、現代でも看過することのできない都市計画論としてあり続けている、との見方が大勢を占めているようである。

例えば、大岡信は岩波文庫版の解説で、『『一国の首都』に何らかの意味で匹敵しうるだけの包括的で懇切丁寧な東京論を書き得た人が他にいただろうか。私の見聞では一人もいない。』と述べ、その理由を「第一には、一個人において露伴の広大な識見に匹敵するものを有する人は、この百年間、他に出現しなかった。第二には、露伴ほどの強い愛情をもって東京という「首都」のことを考えた著述家は、この百年間、一人も出現しなかった。第三に、あるべき「首都」に対して要求しうるあるべき資格を、露伴のように明確に、高度な水準において並べることのできた人もなかった。」と列挙した上で、「彼が東京に要求したことの多くは、今でも変わらずに未来の目標でありつづけている。」との見解を示した。その他、柳田泉『幸田露伴』(一九四二年、中央公論社)、福本和夫『日本ルネッサンス史論から見た幸田露伴』(一九七二年、法政大学出版局)、小木新造『江戸東京学事始め』(一九九一年、筑摩書房)、白幡洋三郎「露伴の都市論を読む」(井波律子・井上章一編『幸田露伴の世界』二〇〇九年、思文閣出版)などでも、同様の指摘がなされている。

そこで本発表でも、現代の都市問題の根源が示されているものとして、あらためて『一国の首都』にみる露伴の都市計画論を読み直してみたい。露伴は慶應三年に江戸の下谷で生れた。翌年明治と改元される。江戸っ子露伴は、江戸から東京へと移り変わり、首都「東京」が誕生、生成していく様相を、実際に目にし、体験した人物なのである。自身が生れ育ったわが町「東京」は、一地域であると同時に、日本の首都であり、世界の都市ともなっていかなばならぬものでもあった。露伴は、愛すべきわが町「東京」の都市づくりを、世界を見据えつつ真剣に考えたのである。発表ではその具体策をみていきたいと思う。